

バイオディーゼルのNEWS

B-style
VOLUME 07

ディーゼル車、2015年にはシェア26%に

J.D.パワーアジア・パシフィックは、世界市場におけるディーゼル車の需要予測を発表した。

この予測は、J.D.パワーの米国本社であるJ.D.パワー・アンド・アソシエイツの市場予測部門が実施しているもの。

それによると、ディーゼル・エンジン搭載の乗用車とライト・トラックの世界市場における需要は、今後10年間で約2倍となり、販売台数は2005年の1500万台から2015年には年間2900万台まで増加。市場シェアは、2005年の18%から2015年には26%に達すると見込まれている。

環境先進国ドイツの取組み

ドイツでは2001年6月、「再生可能エネルギー法」に基づき、バイオマス政令「バイオマスV」が施行されました。バイオマスVでは、バイオマスの定義から活用法、環境基準に至るまで詳細が定められています。

ドイツはバイオディーゼルの生産では世界の先端を行っており、2001年の時点でバイオディーゼル生産施設の年間生産能力は4万8,000トンでしたが、2004年には初めてバイオディーゼル生産量が100万トンを超え、EUにおける主要生産国の位置を占めました。2003年と比較して生産量は44.8%増加し、EU全体のバイオディーゼル生産量の半分以上(53.5%)を生産しています。

バイオディーゼルの給油できるガソリンスタンドはドイツ全土で約1,900カ所あります。

ディーゼル・エンジンは、過去の技術の実績や費用効果の高さなどから、ガソリン・エンジンの代替としての需要が高まっている。

過去10年間の急速な需要増加は、おもに西ヨーロッパ市場で顕著な動きであったが、今後10年間については、ほかの地域での需要増加が目立っただろうという。

また、自動車メーカー別では、現在最もディーゼル車の販売台数が多いのはフォルクスワーゲンで、2番目がフォードで、今後10年間で最も成長が見込まれているのはトヨタであった。

バイオディーゼルスタンドは、約1,900箇所

ドイツ連邦環境省によると、バイオ動力燃料の利用によって2004年1年間で二酸化炭素の排出量を397万トン削減できたと試算しています。ガソリンや軽油などの化石燃料と比較すると、バイオ動力燃料の利用によって主に二酸化炭素を中心として温室効果ガスの排出量を約80%削減できるとしています。

バイオディーゼルの将来性は、これまでの燃料に取って替わるエネルギーとして期待されています。



2006年FIFAワールドカップドイツ大会 コンセプトは「グリーンゴール」

3月31日、フランクフルトにおいて、2006年FIFAワールドカップドイツ大会組織委員会のベッケンバウアー会長とドイツのトリッティン環境大臣が会見を行い、ドイツで開催される2006年FIFAワールドカップにおける環境コンセプト「グリーンゴール」を発表した。

「グリーンゴール」は、大会における水、廃棄物、エネルギー、交通分野における具体的な環境負荷削減のための目標数値を定めたもの。この数値は、「ワールドカップ開催競技場におけるエネルギー、水、廃棄物発生に関する第1次分析」「交通予想」並びに「コスト計算を考慮した環境対策の可能性」を元に算出されている。

- ・水 — ワールドカップ会場における水の需要は、約4.2万立方メートルと計算されている。飲料水の利用削減のための具体的な計画として、雨水、井戸水などの利用度を20%高める、フィールドにおける散水の最適化、衛生施設における水の節約、水道管等の定期的な整備が行われる。
- ・廃棄物 — 大量の廃棄物は、リターナブル容器の使用や廃棄物管理等を通じて削減する。
- ・エネルギー — 競技場におけるエネルギー需要は、20%削減することを求められる。また、電力はできる限り、再生可能エネルギーで賄われる。
- ・交通 — 近距離公共交通機関の利用割合を50%に高める。
- ・気候ニュートラル — 同大会では、約10万トンの温室効果ガスが排出すると考えられており、これを温暖化対策への投資を通じて相殺する。これは、2006年FIFAワールドカップが、「気候ニュートラル(カーボンニュートラル)」が行われる世界初の大規模スポーツイベントとなることを意味しています。

BIO DIESEL NEWS バイオディーゼルニュース BIO DIESEL NEWS バイオディーゼルニュース BIO DIESEL NEWS バイオディーゼルニュース

自立支援法施行で変わる施設運営！バイオディーゼルで、環境への配慮と障害者の自立支援を

2005年10月31日、全国から湧き上がる反対や不安の声の中、障害者自立支援法が特別国会で成立しました。

身体・知的・精神の三障害者に対する福祉サービスを一元化するなど、関係者の声を反映した面もありますが、国の財政削減をすすめる「構造改革」のもので、応益負担の導入により障害者・家族に過酷な負担増をしいるなど重大な問題点を持つものとなっています。

法の施行とともに全国各地で、費用負担の重さに耐えかねた施設入所者や通所者の退所が相次いでいおり、また福祉関係者は、報酬

単価の切り下げによる賃金の大幅カットを余儀なくされ、施設の存続にも影響を与えています。「施設利用費の負担に耐えられない」「費用負担のほうがかつて授産工賃よりも高く、何のために働いているかわからない」「利用者の手元にわずかな金額しか残らず、楽しみにしている外出、買い物がかつてのようにならない」という不満の声もあがっているようです。工賃より高い利用料なら、生活が圧迫され、働く意欲をなくすのは当然です。

「自分が利用したサービスを自分で払うのは当然のことだ」と自立支援法を推進する厚生労働省や自民・公明党の議員さんたち

はこのような言っているようです。一見もっともなことのように聞こえます。しかし、今の障害者の方々がお金に余裕があって生活しているわけではありません。何とか自立しようとして懸命に努力している障害者の方々もそうですが、それを支えている家族の方々、福祉関係者の方々の精神的・経済的苦労も、はかり知れないものがあります。

このような現状を打開しようと、新規事業としてバイオディーゼルの事業を開始し、全国各地で活躍されている方を紹介します。

社会福祉法人 わらしべの里

社会福祉法人わらしべの里が運営する知的障害者通所授産施設「わらしべの家」は通所者25人の授産施設。線香の箱詰めやさをり織り製品の販売などが授産事業。地域内の空き缶、ゴミ拾いなどの清掃活動や自治会活動にも積極的に参加、地域に根ざした福祉施設を目指して運営しています。

バイオディーゼル事業を始めるきっかけとなったのは、セバックから送られてきた一通の手紙。新たな授産事業を模索していたこともあり、事業化が動き出した。事業を開始すると、今まで業者を通して廃棄していた廃油が、リサイクル出来るならと学校給食や食品会社などが協力してくれる事が決まった。

現在、出来上がった燃料は所有するトラックやマイクロバスで使用しているが、走行は上々だと言う。金坂施設長は、「県内の福祉施設では初めての取り組み。もうけることを考えているのではない。通所者が社会の役に立っているという意味のほうが大きい」と話しています。

社会福祉法人 県央福祉会 ふきのとう舎

神奈川県大和市の県央福祉会 ふきのとう舎では、現在大和市との共同体制でバイオディーゼル事業に取り組んでいます。

事務所から少々離れた所にある作業所は、バイオ工場となっており日々バイオディーゼル燃料の精製がおこなわれています。工場内は、非常に整理されており清潔に保たれている。こういった点からもまじめに取り組んで頂いている様子が伺えるように思えました。

今日も何人かの施設の方が作業をされており主に廃棄物の仕分け作業をされています。「BDF燃料は、この仕事の請負先の企業さんにも供給しているんですよ。」とはこちらの支援員でもあり工場長でもある安立さんの弁。なるほどこれならお互いにメリットもありしかも環境にやさしい。まさに理想のカガチではないでしょうか。

安立さんは、副主任の菅野さんとともに日々作業の改善や工夫

にも取り組んでおられ例えばグリセリンの新しい活用方法なども研究されています。「みんなでいろいろなアイデアを出し合っているんですけど今は、非常用のローソクなんかに使えないかなと思ってるんですよ。」とのこと。こうした皆さんからの貴重なアイデアを実用化していれば本当にすばらしいことではないかと思えます。

これらも日々真剣に取り組むと工夫でBDF事業を盛りたてていきましょう。私達も応援しています。



廃食油が絵本に変わるってほんと!?

飲食店などから排出される使用済みてんぷら油のリサイクルが、こどもたちの環境学習のための本や絵本に役立つ。そんな「エコブック」事業の取り組み。

飲食店などから排出される使用済みのてんぷら油をお取り扱いいただいた際に発生する売却金を寄付ください。NPO「え〜子・真庭」にプールし、集まった資金で、市内の小学校に環境教育のための図書を寄贈するという全国的にも珍しいユニークな取り組みです。

今までゴミとして扱われていた廃食油が、資源に変わり、新たなお金の流れを作り、未来あるこどもたちへの環境学習に役立ちます。



小学校で環境教室を開催

有限会社エコライフ商友では、環境への理解を深めてもらう為、市内の小学校2校で4年生児童を対象とした教室を開きました。

講義ではプロジェクターを用いて、アニメーションやクイズを交えながら地球温暖化のしくみや温暖化対策、リサイクルやバイオディーゼルのしくみなどを分かりやすく紹介しました。また講義の後は、バイオディーゼル使用車両への体験乗車を実施。シンボルカー「ビッグベン：ロンドンタクシー」を使い、児童たちはかすかに天ぷらの臭いがする排ガスを嗅いだり、体験乗車を満喫したり、大はしゃぎで環境リサイクルの大切さを身近に楽しみながら実感してもらえたようでした。



天ぷら油はロック！ 最近の音楽祭はECO！

お台場で行なわれた音楽祭で、バイオディーゼル燃料が使われました。最近、ステージの音響、照明などに用いられる発電機の燃料をバイオディーゼルによってまかなう取組みが広がっています。

電気を自然エネルギーでまかなう！
軽油を使っている時と比べてくさい匂いもしない！
空気がクリーン！
エネルギーを使って音を出して楽しむ私達も、自分たちのエネルギーを人任せには出来ません。なるべくクリーンな方法を用いて環境に負荷をかけないようにして遊ぶ。

これが、これからの時代の常識！！

ルマン24時間耐久レース バイオディーゼル車も参加

イギリスのD1オイルズ(D1 Oils)社は、同社製のバイオディーゼル燃料を使用するレースカー「D1 Lola B2K」で、ルマン24時間耐久レースに出場することを明らかにした。

バイオディーゼル車の出場は、ルマン・レースでは初めてのことという。同社では、「優勝どころか、予選突破も難しい」とみているが、レースに出場することで注目を集められれば十分のようだ。

